



# 卒業 ㊦

新型コロナウイルス感染拡大に翻弄された二〇二〇年度の就職活動。高等部三年生六十八人のうち、二十一人が一般企業への就職を目指し、十七人が内定を得た。ほかの生徒は就労移行支援事業所や職業訓練校等へ進む予定だ。

経済の先行きが見通せず採用を控えたり、感染拡大の懸念から、特別支援学校の生徒にとって事実上の就職試験といえる実習の受け入れを断ったりする企業も多かった。進路指導主事の

安城特別  
支援学校の1年



①10月、生徒たちに卒業後についての授業をする説田教諭 ㊦7月、面接指導する黒岩教諭 ㊧10月、内定通知を生徒と確認する林教諭をいづれも安城市の安城特別支援学校で

れ込んだ生徒や、三年次の実習ができないまま、二年次に実習した企業の面接に挑んだ生徒もいた。

就職活動だけでなく、部活動や学校行事も相次いで中止になるなど、学校生活の制約も響いた。授業や行事はコミュニケーションの取り方や、社会人としての振る舞い、言葉遣いを学ぶ場でもある。激変した学校生活の中でも大切な力が身に付くように、教員たちは生徒に声を掛け続け

た。「話し掛けられるのを待たずして話して駄目。自分から発信するんだよ」「相手の立場で考えて行動して」。担任の黒岩愛里教諭は「いつも以上に丁寧な声を掛け、日々を過ごした」と言う。林正記教諭も生徒たちの気持ちや行動の変化を見

逃さないよう、心を配る一年だった。「企業の実習で本来の実力を発揮できるように」と、時間をかけて生徒と向き合い、不安な点はどことん話し合った。

生徒自身の努力と教員の指導が実り、この春、結果的には、ほとんどの生徒が希望に沿った進路を決めた。例えばこれまでの二年次の校内実習に、教職員を相手に名刺を売り込む営業活動を取り入れてきた。教職員があえて無理難題を吹っかけることで、生徒は社会で必要な言葉遣いや接客態度、仕事への意識を学び、自信を付けた。しかしコロナ禍で人との接触を極力減らすと、二〇年度は中止した。学びと成長の場を今後どう確保していくか。説田教諭は「課題は多い。知恵を絞らなければ」と頭をひねる。

# 丁寧な声掛け 実を結ぶ

(四方さつき)